

2022. 5. 1. 主日礼拝説教
聖書：マルコによる福音書 11章 15～19節
『祈りとは何だったのか』

本日の聖書の箇所は「神殿から商人を追い出す」という小標題がつけられておりますように、いわゆる「神殿粛清」の記事です。粛清などという大仰な言葉はスターリンの時代ではあるまいし、今ではほとんど聞くこともありません。もともと粛清とは「不正な者を排除する・反対派を追放する」という意味です。ですから逆に粛清される側の立場から見ると、それは「横暴・独裁・独善」でしかないのです。

当時、つまり厳密にはイエスの時代というよりマルコの時代なのですが、ローマの支配が長引くにつれて人々の心は荒み、エルサレムでは反ローマテロが頻繁に起こるようになっていました。このユダヤ戦争直前のかましい混乱の臭いが今日の記事にも漂っています。

そもそもローマの属国化によってユダヤにもたらされたものは碌なものがありません。その一つに貨幣経済の浸透という経済的侵略が挙げられます。それはユダヤ社会の歴史にとってかつて経験したことのない貧富の差という格差社会の登場だったのです。

では、その構造の中で勝ち組とは誰だったのか。それはファリサイ派や律法学者でした。彼らが自称ユダヤ教そのものだったのです。ですから、神殿詣でを推奨し、商人や両替人にたっぷり儲けさせ、そこから多くの賄賂をとっていたのです。

実に神殿とは、ダビデ・ソロモン時代と捕囚後に建築されたのですが、当時からこの時代に至るまで驚くべきことに役割は一つだけでした。それは犠牲の動物の売買と神殿税の徴収です。

犠牲の動物が一番安いハトが良く売れたそうです。神殿税はギリシャやローマ貨幣を古ヘブル貨幣かティルス貨幣に両替して献げました。この莫大な賄賂を産み出す構造の連鎖をファリサイ派と律法学者は「祈りの家」と呼んだのです。

わたしたちの心は様々に働きます。考える・意識する・判断する・反省する・決心する・感動する・記憶する・想像する・憎む・嘆く・喜ぶ・励ます等々と枚挙に暇がないくらいです。

しかし、それらとは少し異なった働きが心にはあるのです。それは今の自分をありのまま肯定してしまうことへの抗いのような心の働きです。自分で自分を良しとしてしまわない、いわば神の前に立たしめられる自分とでもいいまいしょうか、そのような卑しく愚かな自己絶対化に貶められまいとする心の働きです。その自分に厳しい働きを「祈り」というのです。心の深さのことです。

イエスの神殿肅清とは商人や両替人が対象ではないのです。それは当時のユダヤ教を司るファリサイ派と律法学者の独善的な私利私欲に対する批判と、そして同時に初代教会の未来の歩みにも同じ深い責任が問われていることを指摘するのです。

祈りの家とは何か。それは建物なんかではなく、「人」そのものなのです。人の心そのものが神殿なのです。そして神殿は「祈りの家」なのです。

その心の深さを見失うとき、人は私利私欲に走り、祈りの家を強盗の巣に置き換えてしまうのでしょう。

最後にアウグスティヌスの言葉を引用します。「悪い時代です。困難な時代です。人々は口々にこう申します。しかし、良く生きましょう。良く祈りましょう。なぜなら、わたしたちが時代だからです。」